住居学の認識度調査結果について

桐山　芳和　杉山喜美恵
林　　節子　林　　尚子

1．はじめに

本学にて10年間講義を努めて改めて強く実感することは、年々「住居学」という学問は言うには及ばず、生活全般に対する認識や関心が徐々に低下していることである。これは、他の教科や一般教養に対しても同様な傾向が見られると推察されるが、「住居」は暮らしや文化の基本となるものだけに少なからず危惧をいだいている。

住まいに関する知識やそれに伴う実生活は家庭や近隣環境のなかで伝承されてきたのであるが、家庭生活の方法、家事や行事のなされ方が変化したり、衰退したりするに従って、様々な伝統的起居様式や作法などが大きく変貌しているのは事実である。(文部省がつくっている「学術用語集」建築学編が34年ぶりに全面改訂されることになったことを見ても、住宅構造やそれらの使い方の時代的変化を物語っている)

こんな状況の中で、各公教育に設置されている「家庭科（家政科)」においても、教員の専門性や授業時間数などの関係から現代の実生活に必要な実用的技術や知識の教授が中心となり、日本人として豊かな住まい方、伝統的住まいの意義、住環境や近隣関係のあり方などには言及が少ないのは、家庭がそれらを学ぶ場としての機能を果たせにくくなった現在、もうひとつの問題を提起していると言える。

2．調査目的

前記の状況をふまえて、高等学校教育課程終了までに得た住まいやその環境について学んだ知識および家庭や地域社会の中で得た(と思われる)日常的用語の認識の度合いは、家庭生活や広く日本の住文化への関心やそれらへの参加程度に相関していると考えられる。この調査では、この事について分析できる内容までいたらなかったが、学生たちの認識や関心あるいは興味を示している事項の把握や家政科における「住まい」の扱い方やその内容について弱干の私見を述べるための資料とすることができた。

3．調査方法

1）調査対象

本短大家政学科平成元年度入学生のうち「住居学原論」選択者234人（被服、食物栄養、生活デザイン専攻）を対象とした。

本学学生のみを対象とし、他の世代など調査によって比較検討できるサンプルがなく、一般化できないが、一応の目安となると考えられる。

2）調査項目

質問１－家政や住居学あるいは一般社会学的用語をａ－ｊにグルーピングし、それぞれについてＡ）よく知っている（意味が説明できる)、Ｂ）言葉として知っている（生活や授業で触れ

たけれど説明できない)、C）知らない（聞いたこともない)の３ランクに分けて択一させる。特に伝統的用語については読み方を記入させる。

質問２－これまでの授業や住まいでの暮らしを通して学んだことのある項目とその内容を記述させる。

質問３－「住居学」のどんな内容について学びたいか、指定項目を複数選択させる。

3）調査用紙

住居学基礎用語認識アンケート（1989、４）

東海女子短大美術科研究室

1．次ぎの言葉の意味や内容について、A（よく知っている)，B（言葉としては知っている)，C（知らない）の記号で答えてください。(a－d迄は、各言葉のうえに読み方を書いてください)

a　棟　（　）　切妻　（　）　入母屋　（　）　う建　（　）　軒　（　）
b　建具　（　）　造作　（　）　左官　（　）　指し物（　）　棟梁　（　）
c　縁　（　）　床の間　（　）　鴨居　（　）　欄間　（　）　長押　（　）
d　神殿造　（　）　書院造　（　）　数寄屋造（　）　桂離宮（　）　高床式（　）
e　床面積　（　）　建ぺい率（　）　平面図　（　）　断面図（　）
f　社会資本（　）　日照権　（　）　住権利　（　）　核家族（　）　うさぎ小屋（　）
g　集合住宅（　）　住宅金融公庫（　）　コミュニテイ（　）　都市計画（　）　居住　水準（　）
h　インテリアデザイン（　）　アミューズメント（　）　インテリジェントハウス（　）
i　ＢＯＤ（　）　ＰＰＭ（　）　ルクス（　）　ホン（　）　アンペア（　）
j　鬼門　（　）　地鎮祭（　）　大黒柱（　）　格式（　）　室礼（　）

2．あなたが高校までの家庭科の学習やくらしを通して、住居に関して学んだことについて書いてください。

3．住居（学）のどんな分野について学びたいと思いますか。○印をつけてください。(複数回答可その他は具体的に書いてください)

a　日本の住居の歴史や伝統的意味
b　現代住宅の暮らし方や機能
c　住まいの考え方や作り方
d　住まいと自然および社会環境
e　その他

回答者／専攻　　クラス　　番号　氏名

4）調査結果

質問1．（サンプル数243、（　）内は%表示）

グループ	語　句	読み方		認識度			
		正	誤	A	B	C	N.A
a	棟	141	102	56	134	52	1
	切妻	43	200	11	36	195	1
	入母屋	43	200	14	69	160	0
	う建	6	237	3	9	231	0
	軒	123	120	86	122	35	0
	平均値	(15)	(85)	(14)	(30)	(55)	(1)
b	建具	101	142	42	106	94	1
	造作	93	150	27	75	141	0
	左官	182	61	44	83	116	0
	指し物	155	88	8	32	202	1
	棟梁	114	129	27	84	131	1
	平均値	(27)	(73)	(12)	(31)	(56)	(1)
c	縁	159	84	98	93	51	1
	床の間	223	20	208	32	1	2
	鴨居	121	122	23	46	174	0
	欄間	154	89	60	62	120	1
	長押	13	230	2	20	215	6
	平均値	(28)	(72)	(32)	(21)	(46)	(1)
d	寝殿造			111	123	9	0
	書院造			87	141	15	0
	数寄屋造			15	63	165	0
	柱離宮			36	85	120	2
	高床式			179	56	8	0
	平均値			(35)	(39)	(26)	(0)
e	床面積			102	112	29	0
	建ぺい率			12	45	186	0
	平面図			181	59	3	0
	断面図			176	62	5	0
	平均値			(48)	(29)	(23)	(0)

グループ	語　句	読み方			認識度		
		正	誤	A	B	C	N.A
f	社会資本			56	156	30	1
	日照権			126	61	56	0
	住権利			44	102	96	1
	核家族			211	30	1	1
	うさぎ小屋			177	43	19	4
	平均値			(50)	(32)	(17)	(1)
g	集合住宅			121	100	21	1
	住宅金融公庫			34	161	46	2
	コミュニティー			37	164	40	2
	都市計画			67	168	8	0
	居住水準			19	117	104	3
	平均値			(23)	(58)	(18)	(1)
h	インテリアデザイン			147	95	0	1
	アミューズメント			1	105	134	3
	インテリジェントハウス			10	146	87	0
	平均値			(22)	(47)	(30)	(1)
i	BOD			0	6	236	1
	PPM			5	42	195	1
	ルクス			68	81	94	0
	ホン			84	68	90	1
	アンペア			118	83	42	0
	平均値			(23)	(23)	(54)	(0)
j	鬼門			55	65	122	1
	地鎮祭			34	51	158	0
	大黒柱			193	35	15	0
	格式			49	148	46	0
	宗札			6	35	201	1
	平均値			(28)	(27)	(45)	(0)

質問２（類似項目別累計）

1	間取りやその設計	48
2	台所の機能	19
3	住宅の設備（照明、衛生など）	19
4	くらしやすい住まい	15
5	室内外の環境	14
6	家具の配置、整理	9
7	家族とくらし	6
8	インテリアの初歩その他	10
	一項目以上記入したもの	134（55%）
	学んだことがない	32（13）
	記憶していない	19（8）
	無記入	58（24）

質問３

a	日本の住居の歴史や伝統的意味	50（12%）
b	現代住宅の暮らし方や機能	135（33）
c	住まいの考え方や作り方	160（40）
d	住まいと自然および自然環境	43（11）
e	その他	17（4）

5．調査結果の考察

1）質問１について

各用語のグループは次のように性格づけられる。

a　伝統的建物の外的部分の名称
b　伝統的技術や職能の名称
c　伝統的住宅の内的部分の名称
d　歴史的建物の様式
e　住宅計画の基礎用語
f～h　時事あるいは社会的用語
i　環境や設備の物理あるいは化学的単位
j　習慣や信仰的用語

これらのグループからも住宅は多様な分野に関わっていることを意味していることが分かるが、これらの用語の多くが「住居学」の専門用語ではなく一般日常用語にもかかわらず全般的に認識度が低いとを認めざるを得ない。

a、c グループには、この頃使われなくなってしまった用語が多いが、現代住宅の多くには今だ存在しているし、文学の中などで表現されていることを思えば、現代生活のなかではそれらはかなり形骸化していると思われ、やがて日本の伝統的住文化が風化消滅してしまうのかもしれない。例えば「う建」が「うだつがあがらない」と言った言葉にも現われていたように生活に深く関わっていたものが、建築構造の変化で完全に消滅した例によっても理解できる。

b グループは職業に関わることだけに更に深刻であろう。職人のなり手が少なくなったといわれて久しいが、技能や職能の存在そのものの認識が低ければ当然かもしれない。機械化、大量生産、外国人労働者に依存できない分野であるから社会問題でさえある。「勉強の嫌いな子は大工さんにでもなりなさい」という教師がいるそうだからその根は深い。

d グループは日本史用語でもあるので知識としては比較的高いといえるが、住宅としてだけではなく日本の美としてすでに国際化している「桂離宮」を知らないものが50%占めるのをどう解釈すべきなのか。これは本学学生全体の実態ではないと信じたい。

e グループは「建ぺい率」を除き半数以上が内容を把握していることがわかる。しかし、実際には平面図や断面図のイメージができることを意味せず、住まいの間取り、家具の配置、人の動きなどを構成したり、理解する基礎的知識には至っていないことが推察できる。

f―h グループはマスコミ等に常に登場している用語が多いけれど f, h の一部を除いて総じて認識度が低いのが目立つ。これは、住まいというより社会に対する関心の低さを意味しているのではないだろうか。

i グループは、最近の環境問題に関心があれば当然認識できると思われる「BOD」、「PPM」が極めて低いのを指摘しなければならない。毎日の生活のなかで、生活排水の放流先やその汚染度に全く無頓着であるのだろうか。

j グループは現代生活には馴染まない事項のためか、一様に低い認識度になっている。しかし、これらは住まいに対する日本人の独特な風習や態度を表しているものだけに時代の推移として当然視して良いだろうか。これから益々エスニック（本来の意味からはずれた使い方をされているが）を求める時代にあって、日本だけ

が民族的なるものを軽視したり置き去りにすることは、日本のアイデンテイテイーを失うことに通じるものであろう。

しかし、不思議なことに、現代の若年層の間には星占、運勢などに依存する体質があるといわれるので、家相やいわゆる年廻りなどの迷信が突如出現して合理的な住まいづくりの支障となることも充分考えられる。

次に用語の認識度を裏付ける一つの資料としてそれらの読み方を問うて見たところ、認識度ランクＡ～Ｃの内容に疑いの余地があることが明らかになった。即ち、ＡやＢランクと答えた者が必ずしも正しい読み方をしているとは言えないことである。（ａ～ｃグループ平均値は全てこの傾向にある）また、正しい読み方ができているけれどその内容の認識度が低いものもある。（左官、指物、鴨居、欄間など）

ａ～ｃグループの用語は大和言葉から発し、訓読みされている漢字（字訓）が多いのが特徴であるが、これらの用語を事物として学び、言葉として使うことはもう困難になっているのではないだろうか。従って、住居学の範囲を超えて国語学の問題を提起していると考えられる。

2）質問２について

この質問に具体的に答えたものは約半数（55%）あったが、学んだことがないとはっきり答えたものが13%あることは予想外であった。

家庭科教育が高等学校までの家庭のなかでどのようになされているのか専門外で把握していないけれど、例えば、現在の教育職員免許法の規定で、中学校家庭科免許では「教科に関する専門科目」20単位中、「栄養学、食品学及び調理実習」６単位、「衣服学、衣料学及び衣服実習」が４単位に対して「住居学」は２単位と少ない。（「家庭経営」「家族関係」は２単位）この事が、教師の専門性を片寄らせ、家庭科教育は衣服、食物栄養偏重となり、住居について教授できる教員を少なくしているのではなかろうか。

今、日本の最大政策テーマの一つが「住居」であることは内外共に指摘されるところである。住宅とその環境の改善にはまずそれらへの関心と参加が不可欠であるが、今、家庭が住教育の機能を失いつつあるとき、公教育のなかでこれらをフォローしていくことが期待される。教育のなかで軽視されている分野が結果的に国家としての恥部や未整備部として残る一つの例であるといえる。

住まいについて学んだり実習をしたりしたことのある内容では、圧倒的に「間取り」が多かった。これは、日本の伝統住宅には「たたみ」というモジュール（ユニット）が存在し、部屋の広さや形を規定したり把握し、それらを連続したりすることができるシステムがあることによって「間取り」という概念が一般的になっていることのあらわれであろう。しかし、現代生活ではこのシステムだけでは図れないほどに複雑多様になっており、合理的な間取り、と同時に快適な空間という三次元の把握も必要不可欠である。

次に多かったのが「台所」であった。住まいの中心で特に女子の家庭科教育のなかでは必然的な傾向である。しかし、これは現代住宅の台所が高度に装置化されその機能と清潔度を飛躍的に高めた結果、家事労働空間としてだけで把えられなくなったことによるものであるのだろうか。

3）質問３について

住居についての関心は、その考え方や作り方（40%）、暮らし方や機能（33%）など現代のニーズに合致した項目に集中した。これらは、これまで習った事柄の延長線上にあるもので、自然な傾向であろう。しかし、換言すれば住まいを私的生活レベルのみで把え、文化性、伝統性、あるいは公的なものとしての住環境にまで拡大して把えることが不足していることの証左ともいえる。我国の住宅問題の多くは、室外の環境に存在する事実を思えば、気になる傾向である。

6．おわりに

このアンケート調査は、主に住宅設計を生業としている筆者にとって、伝統住宅やその技術が木を中心としてそれぞれの地方の気候や風土を反映した生活文化や街並が無国籍のプレファブ住宅などに変わって、ふたたび主役たなる気

ざしがあるのか探るためのものであった。しかし、その兆しは講義のなかで熱っぽく語ることによってつくらざるを得ない状況にあったのは予想したとおりであった。

学生たちのおしゃべりや講義への参加意識の欠如の中であっても、建築家として不特定多数の大衆を相手に街頭演説をしているよりかは少なくともましであろうと思って講義を続けてきたし、これからもそうしたい。期末テストの記述のなかで、たとえ観念的であっても住まいの基本的なる部分を理解しはじめた学生が少なくなく、彼女等の将来の住まいについて考える契機や依り処となれば、声をからして講議するのも報われるというものである。